

初芝富田林中学校・高等学校

「私学としての存在意義を具現化」
「超進学校化宣言」でドラスティックな改革を



大阪の南部に立地する初芝富田林中学校・高等学校が新年度早々から注目を集めている。

4月に就任した平井正朗新校長によってドラスティックなまでに実践されるであろう改革の予感が、学習塾や教育関係者から沸き上がり、期待値が高まっているためだ。平井校長の初心表明は「超進学校化宣言」から始まり、入試制度・進路の考え方・カリキュラムなどの根幹部分を大きく精査していく方向性だ。また、2020年度の大学入試改革や新指導要領の改訂を鑑み、組織機能の改善にとどまらず、教員の資質向上に向けて研究開発部を新設。教員の授業力のブラッシュアップにも対応していく。

与えられたミッションは進学校の復活！

初芝富田林中学校・高等学校は1984年4月に初芝高等学校富田林学舎（分校）として開設。1年後の4月には初芝富田林高等学校として独立、併せて中学校を併設した男女共学校だ。教育理念は「夢と高い志、挑戦、そして未来創造」であり、それらを具現化した教育の実践で、これまで多くの有為な人材を輩出してきた。しかし、確固たる進学校として隆盛を誇っていた同校での大学入試結果は影を潜め、特に中学の入学者数や入学率全体の学力は厳しい現状が続いている。

10年前には大阪初芝学園と学校法人立命館とが教学提携を組み、様々な施策を策定、実践してきた。そして今年度、教学提携から10年目を迎える。立命館ではこの時期をエポックメイキングな年として位置づけ、平井氏に校長就任をオファー。両者の考えが一致したのは「初芝富田林が大阪府下に確固たる地位を占める進学校の復活であり、そのためにはドラスティックな学校改革が必要である」ということであつた。

4月1日に就任した平井校長の初心表明は「超進学校化宣言」であつた。教職員たちにとつて驚きの連続であつたことは言うまでもない。平井校長は、これまでのキャリアからも読み取れるが、有言実行の人であり、プレッシャーは物ともしない。実際、管理職として、独自のカリキュラム・マネジメン



平井校長を中心に事務長・教頭・入試部長・入試副部長らがタッグを組む「チーム初富」

トを展開、入試結果や大学合格実績を大きく伸ばし、学校の知名度を高めてきたのは周知の通りである。さらに、現状を聞きつけた地域の塾や教育関係者らは、初芝富田林が今後進化していくことや大阪南部の学校の図式に変化が起ころのでは？など期待を寄せている。

授業力のブラッシュアップや中学入試の大胆な変更

平井校長に就任後の状況を聞くと「日々、是決済ですよ」と即、返答があつた。そのためにも物事はスピーディーに進める必要があるということだろう。本気で学校改革に取り組みとい

う証である。

「今後、大学入試改革で、制度設計だけでなく、入試の設問が変わります。学習指導要領の改定もあります。そのために教員の資質向上が問われるのです。日々の授業こそがすべてなのです。そのためにはカリキュラム・マネジメントとPDCAサイクルしかありません」

保護者や塾が学校に期待をしているのは学力の伸長であり、それを伸ばすのは教員。つまり、教員の授業力がすべて、OJTとOff・JITのバランスですと平井校長は言う。

全体の授業力アップのためと業務の効率化を図るため、既存の組織のスクラップ&ビルドを実行。学年や担任の学習指導・進路指導をコーディネートし、生徒個々の夢実現をサポートする「カリキュラム・マネジメント委員会」は校長自らが委員長を務めるなど、枚挙に暇がない。

中学の入試制度も大幅に変更する。入試広報戦略に伴う入試制度の再設計はマーケット状況と時代のニーズに即応したものにするのが基本と平井校長。



平井正朗校長の初心表明は「超進学校化宣言」



予想困難な時代を生き抜く力をつけるべく教科を超えた視点での探求学習を推進（上）探求学習の授業（中学3年）。各グループ毎でディスカッション（下）探求学習の資料を選択

午後は2科（国・算）入試を実施。●2日目の午前入試は、これまでのリテラ入試に変わり適正検査型入試（国＋算＋理社融合）を実施。午後入試も同じく実施。

●これまでの3日目の午後入試は実施せず、2日目に繰り上げる。

「適性検査型入試は大阪府立としては初の中高一貫校との併願者をターゲットにしています。入試問題にも手を加えるとのこと。数年後には、東大、京大、医学部医学科への合格を出しますよ」。

進路の方向性は数の勝負より第一志望決定率100%へ

学校改革を推し進めている平井校長だが、就任当初宣言した「超進学校化宣言」の背景には深い意味がある。（同校HP参照）「現在、予測困難な時代と言われ、環境、エネルギー、貧困など、地球・地域規模の課題が山積しています。それだけに真の実力が問われており、めざす学力も変化しています」。

日本の学校と言えは、教科科目を基盤としてその到達度を試すことを主流とした入試を突破したことが能力の証と見なされてきました。これは、習得から活用、そして探求へをキーワードに、自らの生涯を生き抜く行動の源となる思考力、判断力、表現力を身につけるために教科を超えた視点への転換が必要になっています」。

進路指導の方向性として、「現状の学力で合格できる大学を受験させるのではなく、より高い志望をもたせ、生徒個々に学力の伸びを実感させ、本当に入学したいと思う第一志望の大学に挑戦、合格させること」とした上で、大学は、「優れた教授陣による最先端の講義、充実した研究環境、全国から集まる仲間たちと切磋琢磨し、人間的に成長すると同時に、幅広い教養や高度な専門性を身につけ、社会に通用するスキルを磨く場」と位置づけ、「第一志望決定率100%」「進路満足度」をめざす。本校の先生方には大学を十分研究した上で、一人ひとりの夢の実現に向けて「チーム初富」で進路指導するようお願いしました」。

平井校長の言葉は続く。「大学に進学することは通過点に過ぎません。ベースにあるのは、これからの国際社会に通用する力です。端的に言えば、人間力と学力が併用している人材育成です。そのためには私学としてのレゾン・デートル（存在意義）

となる学園理念を具現化し、生徒一人ひとりの夢実現をバックアップする体制づくりが急務だと考えます」

※記者より一言

校長室でのインタビューは1時間30分に及んだ。その間、校長室のドアは常にオープンにしてあり、生徒たちがよく顔を出す。平井校長は生徒の話に聞いたり、相談に乗ったりするといふ。学校改革に臨む厳しい表情とは違い、フレンドリーで一教師のごとく穏やかな表情に戻る。教育者の至福の一時は、こんな日常にあるのかも知れない。

DATA

■校舎	長所	平井 正朗
■住居	電話	〒584-0058
■電交	通	大阪府富田林市彼方1801
		0721-34-1010
		7方面からスクールバス運行
		近鉄長野線 滝谷不動駅から約5分
		近鉄長野線・南海高野線 河内長野駅から約15分
		南海高野線 金剛駅から約25分
		泉北高速鉄道線 泉ヶ丘駅から約25分
		泉北高速鉄道線 和泉中央駅から約40分
		和泉市立病院前から約50分
		岸和田市立城東小学校前から約50分
■生徒数		291名(中学校)
		975名(高等学校) (中学・高校共に2018年4月1日現在)
■URL		http://www.hatsushiba.ed.jp/tondabayashi/